1 増澤新会長　就任のご挨拶

9月8日（火）に三島商工会議所で開催された幹事会において、特定非営利活動法人静岡自然環境研究会の増澤武弘理事長が新会長に選任され、10月1日付けで就任しました。

増澤新会長は、静岡大学理学部教授を経て、現在、静岡大学特任教授であり、富士山、南アルプスをはじめとして国内外で極限環境に生育する植物について研究されています。

新会長就任のご挨拶

「富士山における自然の変化」

富士山が世界文化遺産に登録されてから、2年が経過しました。それより以前には「自然遺産」としての認定をめざした経緯もあり、富士山の文化的価値と同時に、「自然の価値」の側面は長く支持され、推薦されてきました。世界文化遺産に認定される際にも、富士山をめぐる文化は、その自然の要素によって育まれ、守られてきたものとされました。

今も、文化遺産の構成資産となった神社などの周りは緑豊かな社叢が存在し、その背後には富士山の山体を覆う、自然の森林を見ることができます。しかし、実際には、長い間安定していたこの自然の条件は、いたるところで変化しつつあります。

まず、富士山頂には、過去には見られなかった、標高の低い場所に生育する維管束植物が侵入し、最近では花を咲かせ種子をつくるようにさえなってきました。また、永久凍土の減少、コケ類の分布拡大も見られます。中腹では、森林限界が上昇し、外来種の増加と多様化など、大きな変化として捉えられるようになっています。森林限界より下には、亜高山帯の常緑針葉樹林、山地帯の落葉広葉樹林が広く分布していますが、ここにも近年大きな変化が見られます。この急速な変化をもたらしているのが、ニホンジカの食圧・踏圧です。ニホンジカは針葉樹の根元付近の樹皮を食べるため、大径木の樹勢が衰え、枯死した個体が目立つようになりました。落葉広葉樹林では、下層や林床の植生が全面的な食害をうけ、天然更新が阻まれています。

さらに、大きいのは人の影響です。夏期に集中する登山による影響の他、多くの人が走るトレイルランなど、集中的な踏み付けが生じる地点が増えてきました。

このような変化に対し、「富士山憲章」に鑑みて、現場での現象をしっかり把握し、できる限り早い対応が必要です。私たちは行政と協力し、適切かつ迅速な対処をしなければなりません。これからも皆様と共に、協力して富士山の自然の保護・保全のため、手を携え活動していきたいと思っております。